

『虞美人草』女性の社会進出

Junko Higasa 2013.11.3

私は、叡山を見て『あの山は動けるかい』と言った甲野さんの言葉と、保津川で「猿」に例えられた黒い影と、糸子の鋏に付いた「縮緬の猿」が、どうにも気になって仕方がない。そしてこう考えた。

「叡山」は国と見ても宗教と見ても「男社会」である。そして糸子は時代に動じない自分の意思をきちんと持った女である。そして縮緬の猿は「鋏」という「物を切る」道具に付いている。すると糸子の存在が表すものは何か、次のように考えた。

時代は、あるいは男は、藤尾のような書物によって知識を得る新しい女によって攪乱されつつある。その女性の流行の中で、糸子は古来の日本の良さを引き継いで、自分の意思を実行できる新しさを持っている。彼女はかつての横暴な男性主導社会を「断ち切る」和鋏を持つ。そして軟弱化した男たちを「美しい日本の魂」あるいは「正しい人間の魂」へ縫い合わせる糸となる。即ち新時代の理想的方向性を示している。ここで漱石は男女同権化していく日本社会のあるべき姿を語ったのではないだろうか。

『あの山は動けるかい』実行権力闘争から、実質利益競争に転化して軟弱化した男たちは動けるかい。藤尾のような女に翻弄されることなく動けるかい。一対一では女に負ける男は、社会という塊で女に勝てるかい。漱石が望むのは、女性の魅力と人間の智慧を併せ持つ女であって、中性化した女ではない。